男女がともにワークとライフを

石井クンツ昌子

女性も男性も仕事と生活が両立できることを前提とした社会の構築は不可欠である。しかし、まだ男性稼ぎ手社会の我が国では、男性の場合は仕事を優先した上での「生活」、女性の場合は子育てを優先した上での「仕事」というように「仕事」と「生活」それぞれのウェイトに男女差が存在している。つまり、女性の就労継続やキャリア形成を考えると、子育てとの両立は重要な課題であるが、男性の場合は、まず仕事は重要視されるが「生活」の部分におけるケア役割の強化についての議論は比較的少なかったように思う。2018年度の男性の育児休業取得率割合は6.2%と上昇傾向にあるとはいえ、女性の82.2%と比較するとかなり低いし、約4割の男性の取得期間が5日未満と短い。しかし、この男女差を是正するような積極的な政策に関する検討が多くなってきたわけでもない。

EUの政策において、近年盛んに使われている「ケアリング・マスキュリニティ」（ケアする男性性）という概念がある。大黒柱は男性、育児や介護などのケアラーは女性という固定観念から脱却して、男性へのケア関与を促すためのキーワードである。筆者も関わり2018年に実施した東アジア大都市居住男性のケア行動を含む役割に関する調査結果を見ると、ソウル、台北、上海、香港と比較して東京の男性の育児頻度は上海と並び低く、介護頻度は最も低い。つまり、日本ではまだ男性のケア役割の重要性についての認識が不十分であると同時に、「生活」の上でケアに主体的に関わっている男性が少ないのが現状である。

これからのワークとライフを考えていくためには、このような生活面におけるジェンダー格差にセンシティブにアプローチすることが極めて重要である。社会における女性の活躍推進のためには、少なくとも女性の就業を抑制せずに、子育てを支援するような制度の強化が必要である。同時に、ケアする男性を増やして、女性の「生活」における負担を低くするとともに、男性が「稼ぎ主」モードから抜け出して、主体的にケア役割を担える環境づくりも必須である。

PROFILE

いしいくんつまさこ：お茶の水女子大学教授・ジェンダー研究所長を経て、2020年4月から立教大学社会学部特任教授。主な研究テーマは家庭内性別役割分業。日本家族社会学会会長、日本社会学会理事、日本家政学会家族関係部会役員、国連専門家会議メンバー、日本学術会議連携会員等を歴任。2012年に全米家族関係学会よりヤン・トロスト賞を受賞。著書・共編著に『「育メン」現象の社会学』（ミネルヴァ書房, 2013）、『Family Violence in Japan』（Springer, 2016）等。